

緒莉

西水島多也

恥辱の制服



恥辱の制服



著：緒莉

画：水島☆多也
原作：BISHOP

CB オトナ文庫



「や、やった！ ちょうど着替えの真つ最中だ……」

起動した動画ソフトの画面を見て、吉元健一は小さくガツポーズをした。映っているのは、赤い布に黒い輪が施されたセクシーな下着姿の女性だ。どこもかしこもむちと柔らかそうであって、くびれるべきところはきちんとくびれている、それはそれは素晴らしい体つきだった。

「……んっ……しょっ……」

彼女はやや前屈みになって、ブラジャーの中に乳房をしっかりと収めようとしているようだ。

「ふひっ、ひひひ……！ 明美さん、今日も綺麗だな……ひひひ」

豊満な乳房が、彼女自身の手で形を定める様子は、たまらなく卑猥だ。それでいて、彼女の表情がリラックスしているのは、こうして他人に見られているとは思わく知らなからだ。

プロローグ 覗き見る熱れた乳房

吉元健一
ふじもとけんいち

友人が経営する店を任されている臨時の電器店員。人付き合いが苦手で、ことに女性の前ではまともに喋れなくなってしまう。

プロローグ 覗き見る熱れた乳房	5
第一章 子持ちの奥さんを後から犯す	8
第二章 彼女デパートガールの一人遊びを覗く	60
第三章 スチムワードスに横柄の恨みを晴らす	101
第四章 姉妹的な女子校生の彼女を覗く	151
第五章 清純系花嫁嬢を	203
プロローグ 孕んでもなお成なしの淫戯	244



成田陽菜
なりた ひな

朝菜の姉妹。お兄ちゃんに憧れて、お兄ちゃんに似せようとして、お兄ちゃんに似せようとして……



徳沢明美
とくさく あけみ

同じマンションに住む大奥。夫とは良い夫婦。夫は仕事で忙しく、おうちでゆっくりできる。おうちでゆっくりできる。おうちでゆっくりできる。



光橋片華
みつはし ぺん

お兄ちゃんの前で、お兄ちゃんの前で、お兄ちゃんの前で……



緒川香純
おぐら かほ

お兄ちゃんの前で、お兄ちゃんの前で、お兄ちゃんの前で……



健一が見ているのは、アダルトサイトのやらせ動画などではなかった。これはリアルタイムで表裏に行われている音付き、つまり盗撮している映像だから、彼女もつた、ぶった真似をすることはない。限られた時間を有意義に使おうと、健一はすぐさまジャージのズボンから朝物ちを引きずったペニスを取り出し、ぐつと握った。マスクメロンを思わせるボリュームミナ乳がひしひしと、先端の突起がチラチラと肉を隠れしている。健一は舌根めすりをして肉棒をしくく動きを速めた。一ひつ………あんなに揉み込むようにして、まるでチでオナニーしているみたいじゃないか。

あの乳に、触ってみたい。どこまで指が沈むのか、むぎやううつと握って確かめてみたい。いや、手で触るだけでなく、あの谷間にペニスを挿入して埋めさせてみたい。健一は、乳幼児だった頃を除いて、女の胸に触ったことなど一度もなかった。この先も触ることはないような気がしている。一度だけいい、あの胸を心ゆくまで味わってみたい。その感触は未知のもので、だからこの健一の中では想像がどこまでも膨れ上がり、強い興奮を呼び起こす。彼女が胸を揉まれ表情を歪める様子を想像すると、眼が覚めてくるほどに興奮がたぎった。『おっ、おっ………明美さん………明美さん………明美さん………おっ、おっ………』夢中になっていくうちに、痺れるような感覚が肉棒に走った。画面の中で、彼女はただ着替えている。極上の眺めを視線に焼き付けながら、健一は根元から込み上げてきた熱い衝動に身を任せた。

第一章 子持ちの人妻を後ろから犯せ！

限界まで覗き直したペニスから飛んだ精液は、網のように濃厚だった。勢いもすごかったものだから、肌も床もすっかり濡れた。健一は慌ててティッシュの箱を手元に引き寄せ、モニターの下で拭いた。部屋自体は正直どうでもいいが、モニターはさすがに故障なんてしたら、お宝映像が見られなくなってしまう。

ついだからと肌や床も適度に拭き、ティッシュを丸めてゴミ箱に放り入れる。中がいつぱいだったものだから、それはパウンドしてゴミ箱から飛び出し、床に落ちた。拾うのも面倒で、そのまま放っておく。寝起きのオナニーは、やはり量も粘度も手強い。健一は人並み外れて性欲が強いのだ。毎日朝晩オナニーを欠かさないし、一度では足りず、二、三発連続で発射することも日常だった。

スッキリしたところで立ち上がり、うーんと伸びをする。一人暮らしとしては無駄に広い部屋は、まったく掃除されていない。誰か訪ねてくるわけでもないで、綺麗に保つ意義を感じられないのだ。とはいえ、弁当の残りが腐ってはいやだし、ゴミくらい出していかないと、机の脇に転がっていた五十枚入りのゴミ袋を一枚取り出す。住み始めて一ヶ月になるこの部屋の家賃を、健一は知らない。なぜなら借り主が健一ではないからだ。

部屋の主は、健一とは学生時代からの付き合いである早川悠斗という男だ。健一の唯一の友人と言ってもいい早川が交通事故でひどい怪我を負ってしまい入院したのは、一ヶ月前のことだった。早川は、父親から継いだ電器屋を経営している。電器製品の販売よりも、その修理や設置を主な業務としている。小さな電器屋だ。修理や点検の予約を全部断り何ヶ月も店を閉めたあたりは店が潰れてしまう。頼むからしばらく店を何とか回して欲しいかと、早川が見舞いに行った健一に泣き付いてきたのが、すべての始まりだった。

早川と健一は、学生時代に同好会で一緒に機械いじりをしていた仲だった。卒業後も健一は早川が忙しくて人手が足りない時に何度か仕事を手伝ったことがあった。短期バイトを繋ぐようなフラフラした生活をして、いた健一にとって、一時的なこととはいえ店をまわること引き受けるのは勇気のいることだった。それでも、月五十万と報酬が破格だったものだから、最終的に首を縦に振った。店への郵便物が届いてしまうことがある

から、自宅の郵便受けも定期的に確認して欲しい、面倒ならそのまま任せてくれてもいい、ということ、それも引き受けた。

始めてみれば、真つ面に働くのはやっぱり面倒だったが、舞い込む仕事自体は簡単な修理ばかりで、思いのほかラクがでている。早川のマンションは、健一がこれまで住んでいたアパートよりもずっと高級で、生活はすこぶる快適だ。

それに何より、電器屋だからこそできる、最高のお楽しみにもありつけた。

まるで、今まで描な役回りばかりだった人生のツケが一気に返ってきたようで、健一は久しぶりに充実した毎日を送っていた。

「うおっ、やばっ」

モニター画面右下に表示されている時刻が目にと留まり、健一は慌てて立ち上がった。遅刻ギリギリというほどではないが、さっと出かける準備をしないと開店時間に間に合わない。十分で身支度をして、部屋を出た。朝食はいつも、コンビニで適当に買って店で食べている。

星早にエレベーターホールへ向かっている途中、背後からドアの開く音とともに、覚えのある声が聞こえてきた。

「おはようございます、これから出勤ですか」



振り返ると、ついさっきモニターの向こうで素肌を晒していた女、黒沢明美がにこやかに微笑んでいた。

「あうっ、お、おはよう、ございます……っ！ ま、まあ……そんな、どこです……」

どうということもないやり取りなのに、どもつしてしまうのは、いつものことだ。明美の顔がまともに見られない、着替えを盗み見た後ろめたさもあるが、健一はそもそも女が苦手だった。学生時代から、女との会話はほとんどなかった。会話どころか、聞かれ、気味悪がられ、忌み嫌われながらこれまで生きてきたのだ。

おかげで、いい年になつた今でも、健一は女とのコミュニケーションの取り方がさっぱりわからなかった。そのくせ、女、というか女性に対する興味は人一倍強い

のだから困つたものだ。

「そうそう、この前直してくださった給湯器なんですけど」

「ふひっ」

健一は表情を引きつらせた。心臓が痛いくらいにドキドキしてくる。

「あれからすごく調子がよくて助かっているんです。本当にありがとうございます」

「あ、そ、そうですね。それはよかったです」

健一はホッと胸を撫で下ろした。自分のしたことがバレたのではなかったようだ。

「私、機械のことはまるでわからなくて……専門の人がご近所にいるなんて、すごく心強いです。困々してすぐ、電気屋のことまでまた何かあったら、お願いしますね」

「は、はい……！ お役に立ってます」

健一が初めて明美と会話をしたのは、一週間ほど前のことだった。明美が部屋から出てきたところに偶然通りかかった、彼女の方から話しかけてきたのだ。「早川電器」という刺繍の入った作業着を着ていたものだから、明美とは顔見知りである早川の知り合いだと思つたらしい。そしてそれは正解だった。

相談したいことがあるというので聞いてみると、給湯器の調子が悪くお湯が出なくなつてしまったのだという。オムツを穿いている赤ん坊がいるため、一日でもお湯が出ないととても困ると言うので、健一は明美の家に上がり、脱衣所に設置されている給湯器をすぐ

見てやることにした。

この時、たまたま健一は小型のカメラをいくつか作業用の鞆に入れて持っていた。無線式の最新型で、ネット通信を介して離れたところからパソコンで映像を見られるシロモノだ。それは防犯のため、店の駐車場に設置しようとしていたもので、悪用しようなんて思つちやいなかった。

しかし、魔が差したということなのだろうか。作業中に赤ん坊が泣き出し、世話をするため明美が脱衣所を出た時、健一はふと思つてしまった。

カメラは小さい。給湯器の空きスペースにちよつと工夫して仕込めば、見つかることはないんじゃないだろうか。

そしてほとんど衝動のままに、健一はカメラを仕掛けてしまった。自分でも驚くほどの手際のよさだった。

一つ仕掛けてしまったことで勢いがつき、明美が赤ん坊の汚れた尻をシャワーで流している間に、夫婦の寝室に忍び込んでそこにまで隠しカメラを設置した。

このマンションは、全室に無線LANが完備されている。おかげでこの一週間、健一は明美の下着姿や裸を何度も盗み見る」ことができていた。もちろん明美は健一のしていることなどまったく知らないで、迅速に、しかも無料で給湯器を修理したことになんたく感謝してくれていて、その時以来気さくに接してくれている。

「明美と話す、心が和む。まるで聖母のようだといつも思う。健一がいくらでもうろが、赤面してよ見しようが、明美は絶対に嘲笑したり罵んだりしない。いつだって屈託なく微笑み、優しく話を聞いてくれた。」

しかしそんな明美にも、健一には一つだけ許せないことがあった。その一点さえなければ、本当に完璧な人なのにも、心から残念に思っている。

「あら、あなた」

「唐突に、明美が健一の後方に視線を向け、驚いた顔をした。」

「どうしたの？ 忘れ物でもしました？」

あなた。

その単語を聞いた瞬間、健一の心の中に黒い淀みがあった。

「ああ、今日の会議で使う書類を忘れてしまっただけ。ハハッ、僕としたことが、うっかりしていたよ」

インテリ真い男が、健一の横を通り過ぎ、馴れ馴れしく明美に近寄っていく。男の名は、徳沢誠一。忌々しいことに、明美はこの男の妻なのだ。

「もうあなた、しっかりしてください。今日の会議はとっても重要なんだって言ってたじゃないですか」

「だから途中で思い出して戻ってきたんじゃないか。大丈夫、まだ間に合うよ」

いかにもエリートという感じの男。つまりは健一の一番嫌いなタイプの男が、当たり前のように明美の肩に手を置く。男の触れたところから明美が汚れていくようで、見ているとムカムカした。

（クソッ、夫ブッやがって……）

激しい嫉妬の炎を湧きさせている視線に気付いたのか、誠一はいぶかしげに健一を見た。

「何だ、君は僕に何か用か？」

「い、いえ……別に……」

「そうか、ならそんなにジロジロ見ないでくれ。それと、今まで僕の妻と話をしていたようだが、何かおかしな真似はしていないだろうか？」

「ぐっ……」

あからさまに不審者を見る目で見られ、怒りで健一の目の前が真っ赤になった。まったく、どこまでもわかつくヤツだ。

「お、お、俺は……」

「うん？ 何だ？」

「お、俺……ま、前に結婚……それで、その……か、感謝……」

言いたい思いだけは漏れそうなのに、口が上手く回らない。健一は、女と同じくらい、こうやって自分を露骨に見下してくるような男が苦手だった。

「何を言ってるんだ、君は誠一が顔をしかめた。『まともにしゃべることすらできないのか。気味の悪い男だな』」

「あなた、そんなひどいこと言わないで」

明美がおろおろしながらも二人の間に入った。

「この方は、前に話した。うちの給湯器を直してくれた電器屋さんよ」

「そういえば、そんな話をしていたな」

しかし誠一は、健一が何者か知っても不審そうな表情を崩さなかった。

「まあいい。そんなことより、早く忘れ物を取ってこないと……ほら、明美も戻るぞ」

「あ、待つてあなた……すみません百円さん、失礼します」

健一の目の前で、バタンと扉が閉まった。まるで犯罪者から明美を引き離すような誠一の態度に、健一は唇を噛み締め、握り締めた拳を震わせた。

*

きょうろと刃りを見回しながら、健一はデパートの中を歩いている。作業着姿で格調高い装飾の施された店内を歩いていると、ひどく遠慮いなどしているような気がして落ち着かない。



「お客様、何かお探しでしょうか」

背後から声をかけられ、健一は胸を高鳴らせて振り返った。

「あら、電器屋さんでしたか。いらつしやいませ。本日も当デパートをご利用いただき、ありがとうございます」

少しおどけたように言ったのは、このデパートの店員である緒川香純だ。美人だが親しみやすい雰囲気を持った女性で、柔らかい笑みを浮かべて健一を見ている。今日はどうされました？ 何かお探しですか？」

「え、ええ……あの、入院……友人に、み、見舞いしようと思って、その……」

「友人って、あの事故に遭われた店長さんですか？ フワッ、電器屋さんはご友人思いなんですね」

健一は、じわじわと顔が熱くなるのを感じた。艶やかな唇の間からこぼれる、跡を残したような上品でまらかな声で褒められては、どうしたって痺い上ってしまう。客席奥からいやな顔を見せないのは当然かもしれないが、香純の笑顔はとてどお喜用には見えなかった。どんなにどもつてしまおうとも、こちらを見る瞳に嫌悪はみじんも感じられない。顔や体も美しいが、香純は何より、心の美しい女性なのだ。健一は思っている。

健一が香純と出会ったのは、早川から仕事を引き継いだ初日のことだった。開店して間もない時間に故障した炊飯器を持って現れた、健一にとって最初の客。それが香純だった。どもりながら必死で対応した健一に、香純はまったくいやな顔をしなかった。炊飯器はコードが切れていただけだったので、健一は十分もかからずに修理してしまった。すぐに直ったことを香純はとてどお喜び、心からの感謝の言葉を言ってくれた。

その時の太陽のような笑顔を見て、健一は香純に恋をした。香純はそれからたびたび店を訪れてくれ、ネット接続のことや最新の電化製品のことなどについて、何度も会話を交わした。話し下手で、これまで女性達から忌み嫌われてきた健一に対して、香純は一切不快な顔を見せなかった。いつだって笑顔で接してくれる香純への思いは、健一の胸の中で膨らんでいく一方だ。

告白する勇気はまったくない。それでも、健一はいつか香純という仲になるという夢を

捨てられずにいた。

「お見舞いでしたら、花や食べるものより、実用的なものの方が今は喜ばれるようですよ。たとえばタオルとか。皆さん自分でも用意されますけど、入院が長くなると足りなくなることも多いみたいで」

綺麗な笑顔。遠んだ声。香純のそばにいて、心臓が激しく跳動してしまう。熱い血液が体を駆け回り、どんどん股間へと流れ込んでいくのを健一は感じた。

「ま、まっすい……」

真つ昼間のデパートで勃起してしまいそうになり、慌てて香純から目を逸らす。

「じゃ、じゃあ、タオルにしようかな」

そう答えたが、せつかく香純が進んでくれるものだから、早川などにはやらず自分のものにしてしまおうと健一は密かに心に決めた。仕事の報告も兼ねてこれから早川の様子を見に行くのは本当だが、そんな大げさな見舞いの品を持つていくこともないだろう。

香純の案内で、タオル売り場に向かう。並んで歩けるのが嬉しくてたまらなかった。

「男性へのお見舞いで、シンプルな柄がいいと思うんですけど……こちらのタオルはいかがでしょう。今治療で、肌触りがとてもいいんですよ」

「は、はい……それじゃ、それをご覧ください」

「ありがとうございます。それでは、係のものに包装させますね」

レジカウターの店員がタオルを箱に入れて包装するのを、二人で待つ。

「……あ、そうそう、私、電器屋さんにお願いたいことがあったんです」

「ふひっ？ あ、と、何か壊れたとか、ですか……」

香純にお願いされることになったら、電化製品のことしか思い当たらない。思った通り、香純は頷いた。

「実は、冷蔵庫の調子がいまいちで、一度見てもらえないでしょうか」

「冷蔵庫ですか？」

「はい、扉を開けても明かりがつかない時があるんです」

健一の心臓が跳ねた。冷蔵庫となれば、いくら小型のものだろうと香純が店に運んでくるのは確しい。つまり……

「あ、あ、あのっ……これ、冷蔵庫だっ、い、家に……家で、み、見ることに、なりますがっ……」

動揺のあまり、いつも以上にどろもってしまったが、香純が気にする様子はない。

「ええ、それで、私の家に来ていただけないかと思っただけです」

断る選択がなく、あるわけなかった。憧れの女性の部屋に入れるなんて、夢のようだが、それに、もしかしたら明美の家にしたように、カメラを仕込めるかもしれないという期待も

あった。以前ネットの相談を受けた時に、香純の部屋で無線LANが使えることは確認済みだ。香純の生着替えが拝めるようになるかもしれない。そう考えただけで、股間のものが暴発してしまいそうだった。

「そっ、それじゃっ、い、いつにしようか。早い方がっ、いいです……え、えっ……」

「そうですね、そうしてもええとありがたいです。私、明日がちょうど休みなんです……あ、でも明日じゃさすがに急過ぎます？」

「あ、いえ……明日は、あ、朝に一件しか仕事、ありませんから……ただ、大丈夫です……ッ！」

「本当ですか？ それならぜひ、明日の午後からお願います」

香純が嬉しそうに笑った。本当によかったと健一はしみじみ思った。

電器屋を手伝うことにして、本当によかったと健一はしみじみ思った。

健一は飛行機に乗ったことがほんの数回しかない。だから郊外にある空港に来たのは、本当に久しぶりのことだった。

とはいえ、飛行機に乗り込またのではなかった。あくまで電器屋の仕事だ。町の電器屋に修理を頼んでくる客なんて、ご近所の個人宅や商店くらいだろうと健一は考えていたのだが、どうやら早川は健一が思っていたよりも手広く商売をしていたらしい。

空港で仕事についても、もちろん飛行機の整備をするわけではない。乗務員達が詰める部屋のエアコン修理を頼まれたのだ。その辺にいた職員に話を渡し、健一は現場であるフリーイングルームの方へと案内してもらった。裏に回ると、客が利用するロビーやフロアとは雰囲気ガラリと変わる。急に空気がビリビリしたように感じられ、健一まで緊張してきた。

この仕事が終われば、午後からは普通の部屋に行ける。頑張つてさっさと修理を終わらせてしまおうと、健一は意気込んでフリーイングルームのドアを開いた。

「し、失礼します……」 あ、あいつ、エアコンの修理にきた、早川電器店ですっ」

中には一人だけスチュワーデスがいた。

「あら、電器屋さん？ どうぞ入ってください」

愛想よく応じてくれたスチュワーデスの声を聞いた瞬間、健一はいきなり体の奥が薄ら寒くなるような感覚に囚われた。苦手である女から声をかけられたから、というだけのものではない。本能に訴えかけてくるような恐怖が腹の底から湧き上がってきて、ガタガタと体が震えだしそうになる。



「どうかしました？ あら、あなたは……」

「ひ……ひ……」

不意そうに顔を覗き込んできた相手を見て、怖気の原因がハッキリとわかった。目の前にいる女は、健一の元同級生だった。

光崎芹華。それは健一にとつて、どんなに忘れたくても絶対に忘れない名前だった。芹華の方も健一のことを思い出したらしく、その顔から営業用の笑みが消える。

「まさか、こんなところで顔を合わせるなんて思ってもみなかったわ。へえ、あなた、電器屋さんになったのね」

「あつ、あう……… はっ……… あ、ああ……っ！」

健一の背中を、冷たい汗がツツと伝い落ちた。芹華には、芹華にだけは、もう二度と会いたくなかった。

健一は学生時代、ずつと芹華にいじめられていた。あの頃の芹華は、容姿麗麗で学業もそこそこ優秀なことを鼻にかけ、まるで女王のように振る舞っていた。クラスの誰もが芹華にひれ伏し、芹華のいいように使われていた。

そんな中、健一に割り当てられた役割は芹華のストレス解消係で、ことあるごとに遺憾な仕打ちを受けた。教室で喋られて写真が撮られたこともあれば、大勢の前で自慰させられたことまである。どんなに話を聞いても、健一をかばってくれるものは、誰もいなかった。

もともと持っていた女への苦手意識は、芹華にいじめられたいさらに悪化し、健一は社会に出てからも誰ともまともな関係を築くことができなかった。就職してからは長閑せず、短期のバイトでしか働けなくなり、底辺の生活を送るはめになってしまったのは間違いない。なく芹華のせいだ。それなのに、いじめた張本人である芹華は大手航空会社のスチュワーデスとして、勝ち組になつていいるなんて、納得いかず、里い感情が、ひたひたと健一の内側を満たした。

「それで？ エアコンの修理だったわね。あなた、ちゃんどできるの？」

「ひう……… は、はい。で、でき……… できるっ……… でき、ますっ………」

「じゃあ、さっさと始めてちょうだい。故障したエアコンはあそこよ。脚立はそこの壁に立てかけてあるものを使ってちょうだいね」

手短に指示を出した後、芹華は近くの椅子に座つて雑誌をめくりだした。

「……へ？」

健一はがカンと口を開いた。自分を前にして、芹華が何もしてこないなんて、とても信じられなかったのだ。

「どうしたの？ 早くしてちょうだい」

「ふひっ？ は、はっ、はい……っ！」

ひとまず考えるのは後回しにして、急いで修理に取りかかることにした。手汗で工具が滑る。今この瞬間にも芹華が何かしてくるのではないかと、不安で不安で仕方がない。たとえば、今乗っている脚立を思い切り振り倒してくるとか。芹華なら、そのくらいのことは平気ではずさった。

しかし芹華は、怒々と雑誌を読んでいるだけで、こちらを見ようとしてこない。それはそれで不安になるが、一刻も早くの場から逃れたい一心で健一は作業に集中した。

「あ、あのっ……あのっ！ しめ、修理っ……お、終わりっ、ました……っ！」

これでこの部屋から出られる。健一は安堵のあまり、膝から崩れてしまいうさだつた。

「そう、苦勞様」芹華はパタリと雑誌を閉じた。「代金は後で会社の方から出るから、悪い